

くら暮らし

自衛隊の行く道に熟慮を

私と「サンダーバード」の出会い、中学1年の時である。1966年に初放送され、テレビにくぎ付けになった。人形劇と思えない人物の微細な動きと救助メカの重量感。高層ビル火災、海上石油採掘ステーションの危機、原子炉事故など、毎回起きる「事件」のリアルさを目を見張った。

そして、大富豪の「パパ」が指揮する「民間人家族による国際救助隊」という設定のユニークさ。母親は既に亡いものの、サンダーバードの活動には「見返りを期待しない愛」が全体を貫流し、丸みを帯びた「2号」はどこか母を感じさせる。

冷戦期の思考と空気を反映してスパイなども出てくるが、米軍の巨大マシンが事故を起こした第2話では、救助に感謝する米軍司令官のスカウトを断り、「軍や国家を助けるのではない。あくまで乗員の人命救助である」と言い残して去っていく。国家を超える鮮烈なメッセージに感動した。

非軍事の救助隊

それから約半世紀。東京の日本文学未来館で開催中の「サン

水島 朝穂

サンダーバード博に思う



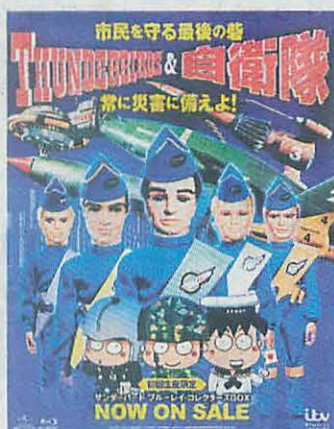
みずしま・あさほさん 1953年東京生まれ。早稲田大教授。広島大助教などを経て96年より現職。専攻は憲法・法政策論。「戦争とたたかう」「東日本大震災と憲法」など著書多数。北州市に仕事場を持つ。

「サンダーバード博」(9月23日まで)を見た。「世紀の特撮が描くボクらの未来」という副題の通り、太陽光、風力、地熱の再生可能エネルギーで制御された秘密基地トレーシーアイランドの模型や鮮明な3D映像など、現代技術を絡めた展示が面白かった。海



秘密基地のジオラマもある日本科学未来館の企画展「サンダーバード博」(CITC)

サンダーバードのフルレイ・コレクターズBOX発売に合わせ、今年春に制作された自衛隊の活動啓発ポスター



サンダーバードと陸海空自衛隊は、常に災害の発生に備えています。

本部、海上保安庁の特殊救難隊を紹介しながら、「本家本元」といえる東京消防庁の消防救助機動部隊(愛称・ハイパースキュー)に触れていないのも物足りない。

21年前、仲間たちと「きみはサンダーバードを知っているか」(日本評論社)を出版した。PKO協力法が国会で可決、成立したころだった。「国際貢献は自衛隊で」という流れに対し、日本国憲法の平和主義に基づき「国際貢献はサンダーバードのように」と、非軍事の国際救助隊構想を提示した。

ユーモアと遊び心を交えつつ、念頭には海外の災害救助に向かうため86年に発足した国際消防救助隊があった。そのシンボルマークは「愛ある手」と呼ばれ、サンダーバードのそれと相当している。95年の阪神大震災後には、国内向けの緊急消防援助隊も発足した。

周辺国との関係

驚いたことに、その自衛隊が今春、隊員募集と活動啓発のポスターにサンダーバードを起用した。サンダーバードは人命救助第一で、いかなる国家にも所属しない。援助も受けない。独立採算の民間組織で、世界のどこへでも分け隔てなく出動する。21年前の私たちの提案通り、自衛隊がサンダーバードを指すというのなら大歓迎である。だが、自民党の憲法改正草案は、自衛隊を「国防軍」にする方向を打ち出している。12月の閣議決定を目指す「新防衛計画の大綱」では、大規模災害を重視する一方で、水陸両用部隊(海兵隊)を新設し「軍」として全ての属性を備える方向で、検討が進んでいる。

参院選の大勝を受け、安倍晋三内閣は集団的自衛権行使の方向にかじを切るだろう。自衛隊を国防軍にするのか、それともサンダーバードに近づけていくか。周辺諸国との関係を含め、憲法9条をめぐる冷静で熟慮ある各論的議論が求められる。